

作家の肖像

第 19 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Photo: 西口博田

駒井哲郎

1920-1976

こまいてつろう

1920年東京都生まれ。銅版画家。35年に日本エッチング研究所を主宰する西田武雄に師事し、銅版画を学び始める。42年東京美術学校(現 東京藝術大学)卒業。50年に春陽会賞、翌年に「束の間の幻影」が第1回サンパウロ・ビエンナーレで在聖日本人賞受賞。72年東京藝術大学教授。戦後日本における銅版画のパイオニアとして幅広く活躍した。76年11月、56歳で死去。

忘れられない姿

忘れられない人、というのは誰しもいるのではないのでしょうか。不思議なことに、それはごく近い人とは限りません。声を交わしたことすらない、ただ見かけただけなのに、強烈に脳に焼き付いている。ふとした時に、思い出す場面がある。

私にとって、駒井さんはまさにそんな人です。

駒井さんが舌癌^{がん}で亡くなる2か月前のこと。私が以前勤めていた神奈川県立近代美術館で、駒井さんが敬愛するパウル・クレーの企画展^(※1)が開かれました。駒井さんは闘病中にもかかわらず、わざわざ会場にいらっしゃったのです。

帰り際、顔面蒼白でやつれ果てた駒井さんが、中庭の壁に寄りかかっていた。偶然その姿を見かけた私は、「ああ、相当ご無理をされているんだな」と。そんな状態でも足を運んだことに、尋常ならぬ生き様を見た気がしました。

冷静な眼と深い思索

駒井さんは自著『白と黒の造形』(講談社)の中で「あまり情熱的には仕事をしたくない」と述べていますが、内側では爆発するほどの情熱をもっていたのではないかと思います。しかし、意志の強さだけでは、自己の芸術を究められないことも知っていました。

だからこそ徹底して自己を律し、常に冷静な眼を内面に向け、深い思索を重ねた。銅版画というのは、一度彫ってしまったら取り返しのつかない、忍耐力を必要とする綱渡りのような作業です。駒井さんは自著の

中で、創作の本質は「時間に対する一種の抵抗とも云える精神の緊張によって求められる」とも語っています。高度な理性と孤高な職人氣質がうかがえます。

思慮深く、決して雄弁ではない方でしたが、親しい知人と酒を飲むと感情を露^{あらわ}にすることも多かったと聞きます。これも、理性を重んじる人柄の裏返しなのかもしれません。

束の間の幻影

駒井さんは、銅版画という目に見える形を通して、目に見えない心の内を表現した画家でした。瞼の裏に浮かぶ夢や幻想を、繊細な感性で銅版に刻みました。何とも言えない浮遊感の漂う「束の間の幻影」は代表作とされますが、駒井さんにとっては、全ての作品が「束の間の幻影」だったのではないのでしょうか。

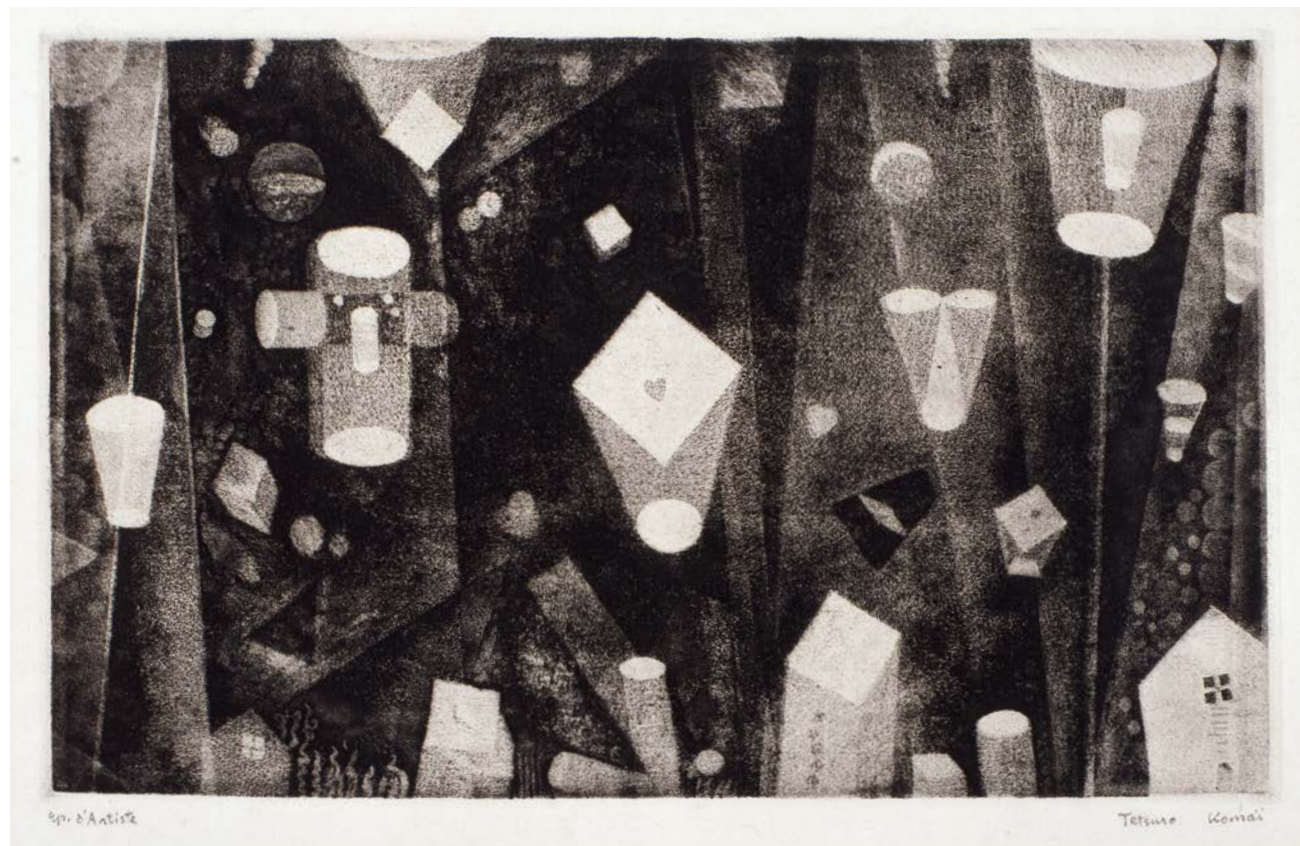
駒井さんの作品を音楽でたとえるなら、大規模なオーケストラではなく、小規模な室内楽といったところ。大きな美術館に展示するのではなく、手元で眺めて味わう小芸術といった印象を受けます。

少年期に銅版画に魅了された駒井さんは、その生涯を通して、ただ一筋に銅版と向き合いました。この天性の銅版画家が残した500点におよぶ作品が、現在、資生堂名誉会長の福原義春氏の寄贈により、世田谷美術館に収蔵されています。(談)

※1 パウル・クレー(1879-1940)
1976年9～10月、神奈川県立近代美術館にて「パウル・クレーとその友たち展」が開催された。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



「束の間の幻影」
サンドペーパーによるエッチング※一部ルーレット180×288mm 1951年
第1回サンパウロ・ビエンナーレに出品し、在聖日本人賞を受賞した作品。
本作について、自著『白と黒の造形』(講談社)で「ふとした瞬間、人の心を通り過ぎる
なんとも云えない解放感を銅版画として視覚化して見たかったのです。」と述べている。



「黄色い家」

ディープ・エッチ、アクアチント(1版多色) 211×161mm 1960年
白黒の銅版画を追究しつつも、1950年代末から60年代初頭にかけでは多くの多色刷り作品も残した。



「3.肩の向うに隠れたその顔だけが どうしても見えない不思議な男の……」

エッチング、アクアチント163×119mm 1969年
埴谷雄高の小説『闇の中の黒い馬』(河出書房新書、1970年)の挿画のために制作された作品のうちのひとつ。

(すべて世田谷美術館所蔵 福原義春コレクション)